

## 29. 論説文に現れるシテイル 文型・シテアル文型について

—大学入門期の教科書を分析対象として—

佐藤 尚子

### 提 要

本稿擬在探讨论述文的特征的基础上，对论述文中出现的シテイル句型和シテアル句型的用法进行分析，旨在为解决这些句型在日语教学中如何处理的问题提供一些新的见解和方法。シテイル句型常常被用来表达“动作的进行”这一用法，在日语教学中最先被教授，也往往被学习者理解为这是其最基本的用法。但是，在论述文中，这种用法除了在叙述个别实例中出现以外，其他并不多见。另外，学习者还经常提出，仅凭平常教学中讲授的“シテアル句型的用法是常常被用来表达‘结果的存留’”这一点说明，很难充分全面地理解シテアル句型的意义和用法。因此，基于对以上问题点的理解和考察，本稿对于这两个句型的日语教学问题提出了一些新的见解和方法。

### 十 一 二 一 一

論説文； シテイル文型； シテアル文型

## 1 はじめに

外国人留学生が大学など、日本の高等教育機関の教育研究現場で接する日本語は、講義や論文など、論説文のものが多く、しかし、大学等に入学するまで彼らが論説文に接する機会は少なく、また、日本語教育で扱われ

ている文型の用法や意味は、小説など物語文を中心にした文法研究の知見をもとに記述されている場合が多く、論説文に関する文法的な知識を得る機会がないまま、授業を受けているのが現状である。

本稿では、論説文の特徴を検討したうえで、論説文に現れるシテイル文型、シテアル文型について分析を行い、また、上級レベルの中国人日本語学習者に対する調査<sup>1)</sup>をふまえ、これらの文型の日本語教育での扱いについて提案する。

本稿では、大学入門期に使われる次の2冊の教科書を分析対象とした。

- ・西尾道德ほか(2000)『農学基礎セミナー 作物の生育と環境』農山漁村文化協会(千葉大学園芸学部指定参考書)(以下、園芸教科書とする)
- ・田中成明(2000)『法学入門——法と現代社会——』(放送大学教材)(以下、法学教科書とする)

## 2 大学入門期の教科書を分析対象とする理由

大学等の高等教育機関の教育研究現場で使われる語彙や文の用法は、高等教育機関で教育を受けるのであれば、どのような分野でも知っておくべき学術的なものと、ある特定の専門分野だけで使われ、それを専攻する者だけが知っていればよい専門的なものと大きく2つに分けられると言えよう。

専門分野では、一般の日本語とは異なった用法が使われる場合がある。例えば、科学技術日本語について扱っている山崎ほか(2002:223)には、「～ていく」「～てくる」について、次のような記述がある。

「～ていく」「～てくる」はともに変化の過程を表す。一般日本語では「～ていく」はある時点以後の事態を問題にし、「～てくる」は、ある時点までの事態を問題にする。しかし、科学技術日本語では、過去の現象について断定するので、両者の違いは次のような書き手の視点の違いになる。

「～ていく」：書き手が望まない状態に変化したとき

例) 温度が徐々に高くなっていく。(望まない)

「～てくる」：書き手が望んでいる状態に変化したとき

例) 温度が徐々に高くなってくる。(望んでいる)

専門分野では、一般的な用法とは異なる、その分野特有の語彙や文の用法があり、それらの指導については、その分野の専門の教員が行うべきものであり、日本語教育の教員は高等教育機関で一般的に使われている学術的な日本語および専門分野の入門期に使われる日本語について指導すべきだと考える。しかしながら、現在、学術的な日本語および専門分野の入門期に使われる日本語指導のための教材は不足している。本稿では大学の入門期に使用される教科書を分析対象とし、この分析から得られた知見を教材開発に活用したいと考えた。

### 3 論説文に現れるテンス・アスペクトの特徴

大学の入門期の教科書で使われる文章のタイプは主に論説文である。論説文に現れるテンスとアスペクトは次のように言える。テンスとは、「出来事時と発話行為時との時間関係」の違いを表し分ける文法的カテゴリーである<sup>[2]</sup>。基本的に、論説文は、個別具体的なできごとを表さず、一般的抽象的なことがらを表す。このため、「～を行った」「～を検討した」のように、過去のできごとについて述べる場合には、過去形でテンスが現れるが、それ以外のテンスは現れにくい。また、論説文では、個別具体的な動きは現れにくい、状態（動きと違い、時間的な展開の過程のない、静的な事象<sup>[3]</sup>）は現れるため、動きの時間的進展のとらえ方を表す文法的カテゴリーであるアスペクトはある。

## 4 シテイル文型について

### 4.1 シテイル文型の用法と日本語教育

日本語教育の現場で使用されている教科書に取り上げられているシテイル文型が表す用法は、教科書によって若干の違いがあるとしても、基本的には次の①、②で、そのほかに「繰り返し」「経験」「記録」などの派生的な用法があるとされる。①、②はシテイル文型に用いられる動詞の種類によって決まる。つまり、動作動詞が用いられる場合は、動作の進行、変化動詞が用いられる場合は変化の結果の継続になると教えられている。

①動作の進行：田中さんはコーヒーを飲んでいる。

②変化の結果の継続：鈴木さんは結婚している。

中国人日本語学習者 13 名に対する調査でも、全員が用法の第一に「動作の進行」を挙げた。また、「変化の結果の継続」も全員が用法の 1 つに挙げていた。その他、「習慣」「繰り返し」「単なる状態」など学習したとおりの回答が見られた。

しかし、シテイル文型について、次のような点についてはあまりきちんと教えられていない。

(1) ①動作の進行、②変化の結果の継続の 2 つのタイプは、文脈によって、またはともなわれる副詞によって変化動詞が進行を表したり、動作動詞が変化の結果の継続を表したりすること。

1) 木の葉がひらひらと落ちている。(変化動詞が動作の進行を表している場合)

2) 暑いのだろうか、窓を大きく開けている。(動作動詞が変化の結果の継続を表している場合)

(2) 「やせている」のように、形容詞相当のはたらきをしているシテイル文型があること。

(3) 「すぐれている」「そびえている」など、シテイルの形しかとれないものがあること。

(4) 「意味する」「異なる」などスルでもシテイルでも意味に差がない動詞があること。

(5) 論文などで他人の説を引用する場合には、普通シテイルの形が使われること。

### 4.2 大学の入門期の教科書に見られるシテイル文型の用法

シテイル文型は、園芸教科書には本文 230 ページに約 650 例、法学教科書には本文 239 ページに約 1,020 例を見ることができた。

「変化の結果の継続」「繰り返し」など初級で教えられている用法の他に、関係を表す動詞「引用」など教えられていない用法も見られた。

① 関係を表す動詞 (スルでもシテイルでも意味に差がない動詞)

③ 気候はさらに長い時間範囲をもち、数年から数十年以上の長時間の

氣象の総合状態を意味している。(園芸教科書)

- 4) 意見審査権の行使の仕方もアメリカとは大きく異なっている。(法学教科書)

(2) 引用

5) このような過程を、ドイツの法律学 K. エンギシュは「規範と生活自体の普段の相互作用、視線の往復」と表現している。(法学教科書)

論説文においては、複数のできごとの間の関係を述べること、および、引用は論理を成立させていく上で重要な要素である。このため、「関係を表す動詞」および「引用」についてその用法を知っておく必要がある。

この中で、シテイル文型の中心的な用法として教えられている「動作の進行」が現れるのは、法学教科書にある次の例のみであった。

6) 例えば、自動車を運転していて、信号を無視し、横断歩道を渡っている人に重傷を負わせた場合、警察は、運転者を刑法 211 条の業務上過失致死罪の被疑者として検察官に送致し、(後略) (法学教科書)

6) は、個別的なできごとが具体例として述べられている例である。この場合、シテイル文型を使用することによって、できごとの進行を具体的に描写している。「動作の進行」とは、目の前にそのできごとが展開している、ある動きが行われていることを表す用法である。小説などでできごとの描写を主とする物語文では、あるできごとが眼前で展開することを表す必要があり、「動作の進行」が大きな部分を占める。しかし、論説文は一般的抽象的なことがらを表すことを本分とし、眼前に起きているできごとを表す必要があるのは、ここに挙げたような個別的なできごとを具体例として述べる場合に限られる。

また、「動作の進行」はその動きが終了するとともに消える。つまり、動きに従属したものである。一方、シテイル文型の「動作の進行」以外の用法は動きが終了した後起こるものであり、動きからは独立していると言える。つまり、「動作の進行」はそれ以外のシテイル文型とは異なった性格を有している。論説文で、一般的抽象的なことがらを表す場合には、動きの描写を必要としない。このため、動きに従属した「動作の進行」は、個別具体的なできごとを表すところ以外では現れにくいということになる。

## 5 シテアル文型について

### 5.1 シテアル文型の用法と日本語教育

シテアル文型は、初級教科書で扱われ、他動詞と合わさって「結果の残存」を表す用法と、ある目的のために、ある行為を行い、その効果が残っている「効果の継続」の用法の2つがあるとされている。また、「結果の残存」を表す用法では動作主が存在が含意されていると説明されている。

中国人日本語学習者 13 名に対する調査でも、全員が「結果の残存」を挙げた。それ以外の用法として、「準備の完了」を 5 名が、「現在の状況に何らかの影響を与えていることを表す」を 2 名が挙げた。「他動詞しか使えない」ことを 2 名が、「誰かの存在がある」ことを 1 名が述べていた。

### 5.2 大学の入門期の教科書に見られるシテアル文型の用法

シテアル文型は園芸教科書に 7) ~ 10) の 4 例見られたが、法学教科書には用例がなかった。シテアル文型は論説文には出現しにくい文型と考えられる。

7) 生物環境の要素、物理環境の要素、科学環境の要素の代表的なものを記入してある。

8) 照度の測定には、照度計が用いられ、感部の波長感度が人間の波長感度に合わせてある。

9) 土壌 pH の改善目標は 6.0 ~ 6.5 に設定してある。

10) 育苗ベッドや鉢植え植物をのせたベンチ栽培など、培地の量が少なく、また、一般土壌と隔離してあるばあいに、必要熱量が少ないので培地の加熱・冷却がおこなわれる。

7) ~ 9) はいずれも、その文と同じページにある図表を説明する際にシテアル文型が用いられている例である。10) は「隔離する」という行為の結果の残存が見られることを表す用法である。

岡田 (1987) では、シテアル文型を大きく A、B の 2 つの型に分けていて、A 型は「意志的な行為の結果生じる、対象の存在その他の状態が視覚からえられる形で存続していること」を表し、この型の表現は「場面描写」とでも呼ぶべき性格を持っていると述べている。そして、A 型は

森田(1977)などで述べる「行為の結果の残存」の特徴づけにほぼ対応するものだとしている。また、B型は動作主が引き起こした行為の結果もたらされる事態が、何らかの意味で基準時に関与していることとしている。

村田(2008)はシテアル文型について「目の前の『みえるもの』、さらには聞き手に指し示してことさらに『見せたいもの』を表す形」と規定している。

シテアルのアルが存在を表すところから、シテアル文型は、基本的には、ある行為の結果が、視覚的にとらえられる状態で存在している用法と規定できる。従来の日本語教育での扱いには、この「視覚的にとらえられる状態」という説明が欠落しており、学習者の正確な理解が進まなかったと考えられる。特に、「結果の残存」という用法の説明には「視覚的にとらえられる状態」が不可欠と考えられる。

視覚的にとらえられる状態で存在しているということから、論説文では、視覚的にとらえられる図表等が存在しているところ以外に出現しにくいと考えられる。

また、益岡がB型の1つとする「行為の結果が基準時において何らかの有効性を示す」ものが、学習者が「準備の完了」と理解しているものにあたる。「準備の完了」というのは学習者にとっては理解しやすい規定ではあるが、用法としての理解が狭くなり、正確な理解から遠ざける結果となると考える。

## 6 まとめ

本稿では大学の入門期に使用される教科書でのシテイル文型、シテアル文型の用法について明らかにした。シテイル文型については、文章のタイプによって、出現のしかたが違い、多くの学生が一番基本的な用法と理解している「動作の進行」は、論説文では、限定された場合にしか出現しないこと、シテアル文型については、論説文では、あまり出現しない文型であるが、日本語教育での従来の扱い方では不十分で、論説文に出現した用法を正確に理解することはむずかしい。

シテイル文型、シテアル文型は初級で扱われるが、そこで教えられる用

法の説明では不十分であったり、教えられる以外の用法が存在したりする。しかし、現在の日本語教育では、初級で教えた文型を、中級、上級で改めて取り上げ、それぞれのレベルに必要な用法を教えるようなことは行われていない。このため、学習者は初級で得た文法的な知識であらゆる文章を理解し、また、その不十分な知識で、話す・書くという文の産出を行っている。これらの問題を解決していくためには、中級、上級での文法シラバスを作成し、初級では扱われなかった用法について取り上げていくことが必要である。

また、日本語教育で一般的になされている用法の説明では不十分なものも多い。これらの見直しも必要である。

### 注

- [1] 上級レベルの中国人日本語学習者に対し、シテイル文型、シテアル文型をどのように理解しているかについてアンケート調査を行った。

調査時期：2009年1月～2月

調査方法：質問紙を配布し、回答を記入する

調査対象：千葉大学文学部および人文社会科学研究所博士前期課程に在籍する中国人日本語学習者13名

中国人日本語学習者13名の日本語学習歴、日本語能力試験1級の合格状況、日本語教師としての経験の有無は以下である。

- ・日本語学習歴：1～5年3名、6～10年8名、11年以上2名
- ・日本語能力試験1級合格者：12名
- ・日本語教師の経験がある者：6名

- [2] 朝倉日本語講座6 文法Ⅱ(2004) pp.174

- [3] 日本語記述文法研究会(2007) pp.4

## ● 主要参考文献 ●

- ① 庵功雄ほか（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネット ワーク
- ② 尾上圭介編（2004）『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店
- ③ 日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法3』くろしお出版
- ④ 益岡隆志（1987）『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- ⑤ 村田美穂子（2008）『体系日本語文法』すずさわ書店
- ⑥ 森田良行（1977）『基礎日本語』角川書店
- ⑦ 山崎信寿ほか（2002）『科学技術日本語案内 新訂版』慶應義塾大学出版会